



# 星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2015年08月03日

## 大地と向き合う (1)～(6)

(1)

春から、一人の農民として大地と向き合いはじめた賢治。一方で、理想とする農民文化のために、その夏には「羅須地人協会」を設立し、様々な活動を始めた。

実際の生活はどうだったのだろうか。直前までの教師という生活とはうってかわり、ほぼ肉体労働の農作業は、賢治にとってはかなりこたえたようである。それは、この時期に書かれた「開墾」という作品に現れている。

「野ばらの藪を、  
やうやくとってしまったときは  
日がかうかうと照ってゐて  
そらはがらんと暗かった  
おれも太市も忠作も  
そのまゝ笹に陥ち込んで、  
ぐうぐうぐうぐうねむりたかった  
川が一秒九噸の針を流してゐて  
鷺がたくさん東へ飛んだ」

筆者もかつて藪のような場所を耕して、畑にした経験がある。土地そのものはきわめて狭かったが、絡まった藪を刈り取り、その根を掘り出すのに余りに手間がかかり、閉口した覚えがある。人力で開墾する困難さを思い知ったが、賢治もそのような心情を端的に詠っている。おそらく日のまだ低い早朝からはじめて、すぐに終わると思ったのに、結局は「日がこうこうと照って」いる昼までかか

ってしまったのだろう。羅須地人協会に出入りしていた若者だろうか、手伝ってくれた人と共に、そのまま笹藪に倒れて眠りたい気持ちになったのだろう。

賢治が大地と向き合い始めた頃、農学校の教え子が訪ねた時の会話が残されている。

「最初の日はやっと二坪ばかり、その次の日も二坪とちょっとばかり、何せ竹藪でね、夕方には腕がジンジン痛む。しかし今では十坪くらいは楽ですよ。体もなれて、もうなんともない。」（「年譜 宮澤賢治伝」 堀尾青史著より）

という賢治だったが、その教え子は、破れた靴下のかかとの穴のところから、コードチンキが塗られた痛ましい切り傷を見つけ、鋏で切ったのではないかと想像している。教師生活から、いきなり農業への転身は、覚悟はあったとは言え、かなりきびしいものだったに違いない。

さらに、食生活も質素だった。三日ごとに一度に飯を炊いて、梅干しを入れて井戸へつるして保存していた。それを取り出しては汁を注いで、たくあんやレタスなどの葉ものなどのおかずだけで済ませていたようだ。賢治を訪ねていった知人などの話から、そのあまりに質素な生活を聞いた賢治の母は、心配のあまり、家で作ったあずきのすいとんを妹クニに持たせたことがあった。ところが、賢治はそれを受け取らず、これからも絶対に持ってこないように、とそのまま返してしまったという。花巻の名家である実家とはあくまで独立して一人暮らしをしようとする賢治の心意気が現れたエピソードではあるが、周囲の目は決してそうではなかった。そして、こうした生活は、やがて賢治の体をむしばんでいくことになる。

(2)

賢治が設立した「羅須地人協会」の活動は、ある意味で革新的であった。既に紹介したような、レコードを聴くコンサートや、不要品の競売や交換の会を催すことはもちろん、子ども向けの童話の朗読会、肥料や農業に関する実践的な講義、農機具や農業服に関する研究会、肥料の指導や設計、花壇の設計、さらにはエスペラントの勉強会や、農民による楽団の結成のために自らチェロを購入するなど、きわめて多彩であった。特に、最初の年の年末には上京して、エスペラントやチェロを猛勉強したようである。

これらの活動、特に芸術の考えをまとめたものが、「農民芸術概論綱要」となっている。これ自身は発表されることは無かったが、没後、全集に掲載され、なかでも序論にある言葉

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

は、銀河鉄道の夜を貫く賢治の思想を示す意味で有名である。

ところで、この「農民芸術概論綱要」には、宇宙という言葉が3度、現れる。序論で現れるのは集団的社会を示す比喩としての宇宙、そして農民芸術の本質のところで見られるのが

「農民芸術とは宇宙感情の 地 人 個性と通ずる具体的なる表現である」

ここで、協会の名前にも織り込まれた「地人」という言葉に通じる感情に、宇宙をつけているところは興味深い。さらに農民芸術の総合の章の冒頭は、

「……おお朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようでないか……」

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう

しかもわれらは各々感じ 各別各異に生きてゐる

ここは銀河の空間の太陽日本 陸中国の野原である

青い松並 萱の花 古いみちのくの断片を保て

(後略)」

雄大な宇宙の微塵のような自分たちが、芸術をもってその四次元の芸術を創造するとしている。なんと壮大な目標ではないだろうか。すでに賢治の中では、宇宙の茫漠たる時空間と芸術の無限の可能性を重ねてみていたのかもしれない。

しかしながら、当時の状況からすれば、保守的な農民にすんなりと受け入れられることはなかった。レコードにしても、教師時代に得た収入があったからこそできたことだし、もともと昼の農作業に疲れて、夜にレコードコンサートへ足を運ぶなどという農民は多くなかった。子どもたちは、朗読よりも賢治が配るおかし目当てで立ち寄っていたし、実際、講義に来るのは賢治に教わった農学校の卒業生や、何らかのつながりのあった若い人々だけだった。宮澤家という比較的恵まれた名家の御曹司が、ちょっと風変わりな農家のまねごとをしている、とみられていたようだ。事実、秋には収穫前の白菜をごっそり盗まれた。それだけ反感を買っていたのか、あるいは農家の状況が厳しかったのか、わからない。しかし、前者の可能性は高い。「春と修羅」の中で、賢治は心情を詩にしている。

「盗まれた白菜の根へ

一つに一つ 萱穂を挿して

それが日本主義なのか

水いろをして

エンタシスある柱の列の

その残された推古時代の礎に

一つに一つ 萱穂が立てば

盗人（ぬすびと）がここを通るたび

初冬の風になびき日にひかって

たしかにそれを嘲弄する

さうしてそれが日本思想

弥（いや）栄主義の勝利なのか」

（春と修羅 第三集 七四三〔盗まれた白菜の根へ〕より）

昼は農作業、夜は集会・講義が粗食の中で続けば、それだけで疲れるだけでなく、農業指導や肥料設計などをほとんど無償で行っていた。心身共に疲れはじめていた賢治にとって、盗まれた傷跡を、どんな論理で納得させれば良いか、という葛藤を感じさせる。

(3)

賢治は、隠遁者のように自ら自給自足を行う独居生活だけが眼中にあったわけではない。その家を「羅須地人協会」として開放し、そこで農民芸術を普及しつつ、理想的な農村をめざして自ら力になれることはなんでもやっていた。とりわけ地質学や化学の知識を生かし、多くの人に農業指導を行ったり、頼まれれば花壇の企画・設計そして実際の作業まで行っていたのである。

とりわけ肥料の指導は懇切丁寧で、その農地の地質学的状況を見聞しつつ、時には自らが農家に出向き、それに合った肥料配合を決めた設計書を書いて渡していた。これは「肥料設計」と呼ばれており、その設計書の数は1927年では6月までに二千枚に上ると言うから驚きである（「年譜 宮澤賢治伝」宮尾青史著）。補遺に収録された「それでは計算いたしませう」という詩に、その肥料設計の詳細さを読み取ることができる。

「それでは計算いたしませう  
場所は湯口の上根子ですな  
そここのところの  
総反別はどれだけですか  
五反八畝と  
それとも百刈勘定ですか  
いつでも乾田ですか湿田ですか  
すると川から何段上になりますか  
つまりあすこの栗の木のある観音堂と  
同じ並びになりますか

(以下、略)」

土地の条件、土壌の種類、日照、これまでの作物や雑草の種類、肥料の経験、今年の作物に関する希望などを細かく聞いている。この詩は長すぎてとても全部を紹介できないが、ほぼ毎日のように行っていたようである。

こういった農業指導は、乞われなくても行っていたようだ。通りがかりに声をかけ、田んぼの土を自ら指で試して、昨年の稲の出来具合と肥料を聞き出しては、今年はこちらよいと指示をしていたという。

花壇の企画・設計なども、その延長上にあった。ただ、もともと昼は自ら農作業を行うことも多く、夜は集会・講義が続き、さらに毎日粗食となれば疲労が貯まっていくのは必然である。もとより農業指導や肥料設計はほとんど無償だ。おかげで実際に収量が増えたり、成功した農家は実際に存在する。しかし、当時の天候不順は賢治の指導の限界を越え、賢治の努力も裏目に出てしまう。特に1928年の夏は、東北地方はまれに見る高温・干天に見舞われた。雨がほとんど降らず、干ばつに勝てずに枯れていく作物を前に、どうしていいかわからない農家は賢治を頼りはじめる。賢治は測候所に言っでは見通しを聞き、農家を訪れては励まして回った。しかし本来、天候のせいにはすべき現実を、かつて指導を受けた賢治のせいにする農家も現れる始末である。酷暑の中、農業指導に東奔西走した結果、賢治は疲労困憊して、ついに倒れてしまったのである。その後、実家に戻り、療養することとなり、羅須地人協会はついに再開できないまま、終わってしまうことになる。

最終的に諦めざるを得なかった協会活動だったが、実は楽しいこともないわけではなかった。新しい土地へ出かけ、新しい人に巡り会うという楽しみもあったのである。

(4)

賢治に関して、女性との浮いた話はほとんど伝わっていない。鼻を悪くして入院した中学時代、その病院で看護婦に淡い想いを抱いたことは以前にも紹介したが、その後は東京でも地元でも、ほとんど皆無である。むしろ、賢治作品には女性を修羅の如くに思うような表現も散見され、同性愛的な性格を持っていたとする意見もある事は確かだ。ただ羅須地人協会の活動の中で、賢治は様々な人物、特に女性と出会ったことは確かである。

賢治にとってはあまり愉快的思い出ではなかったのが、賢治の第二の恋人とも呼ばれることとなった高瀬露である。岩手県立花巻高等女学校の教諭で、1927年頃に稗貫郡湯口村の宝閑小学校の先生となった。当時の音楽関係の集まりなどで、賢治を知ったとされている。賢治に好意を持った露は、もともとクリスチャンであったが、同じ教会に通っていて羅須地人協会に出入りしていた高橋慶吾に頼み込んで、彼女も羅須地人協会に出入りするようになった。クリスチャンでもあった露は賢治の一人暮らしに同情してか、次第に勝手にやってきて食事や掃除までするようになった。最初は露を

「しっかりした女性だ」と褒めたたえ、世話をしてくれるのをありがたがった賢治だったが、その行動が次第にエスカレートしていくと困惑を隠さなくなっていた。やがて賢治と結婚するとまで思いつめた露は一日に何度も来るようになったらしい。賢治はどうかこうにかして、彼女が来ないようにと、自分は、当時不治の病と恐れられていた癩病だという作り話をするなど、実に様々な努力したという。

しかし、とかく田舎のことである。すぐに噂となって広がったのだが、やがて肺の病を得て協会活動をやめざるを得なかった事態に至って、うやむやになってしまった。その後、露は賢治を恨むようになって、賢治の悪口を言いふらしたとされる。賢治は露を迷惑と思いつつも、その好意を無にはできないという根っからの優しさのために、断るタイミングを間違えて墓穴を掘ったのかもしれない。

ところで、有名な「雨ニモマケズ手帳」に

「聖女のさましてちかづけるもの  
たくらみすべてならずとて  
いまわが像に釘うつとも  
乞ひて弟子の礼とれる  
いま名の故に足をもて  
われに土をば送るとも  
わがとり来しは  
たゞひとすじのみちなれや」

という詩があるが、一般的には、賢治が露の暴言に怒って書き付けたとも言われている。しかし、これは露との一件より数年も時期が遅く、別の人物では無いかとする意見もある。この協会時代、賢治はもうひとりの女性との出会いを経験している。

(5)

おしかけ女房的といわれるほど積極的で、世話好きの女性・高瀬露に困惑していた賢治だったが、羅須地人協会時代には、もうひとりの女性と出会い、そしてどちらかといえば前向きな想いを抱き始めていた。

女性の名前は伊藤チエという。1905年、岩手県水沢（現在の奥州市）の豪農、伊藤家の四女として生まれた。盛岡高等女学校を卒業した後、東京で働いていた兄・七雄を頼って、上京して幼稚園の保母として働いていた。この兄の七雄はなかなかの人物である。関東大震災時に、朝鮮人騒動が持ち上がったとき、彼は自ら経営していた寮にいた朝鮮人数十名を守り切ったと言われている。その後、ドイツに留学することになったが、その間に肺を病み、帰国療養することになった。療養のために温暖なところとして選んだのが伊豆大島である。チエは、兄の看病のため、勤めを辞めて一緒に伊豆大島で暮らすようになった。

その後、七雄には伊豆大島で農芸学校を開設したいという夢が膨らんでいったという。そのために、いろいろ指導を請いたいと思って相談しているうち、たどり着いたのが賢治だった。さらに、賢治が花巻の名家である宮澤家の長男だったことから、七雄は妹のチエを引き合わせ、できれば縁を結ぼうと考えたらしい。

1928年春、七雄はチエを伴って、宮澤家を訪れる。表向きは農芸学校への指導を仰ぐためだった。もちろん、賢治にとっても、新しい農芸学校の構想は興味を引くものだったに違いない。ただ、一種のお見合いとして連れて行かれたチエにとっては、いささか拍子抜けするものだったかもしれない。後年に彼女が残した手紙に、賢治の印象が書かれている。

「あの人は、(中略) 何かしらとても巨きなものに憑かれてていらっしゃるご様子と、結婚などの問題は眼中に無いと、おぼろ気ながら気付かせられました時、私は本当に心から申訳なく、はっとしてしまいました」

一方、賢治は好意を持ったとしても、それを関係者に明快に言うタイプでは無かった。まだ高瀬露との関係がぎくしゃくしている頃なので、賢治にとっても、露とはまったく違った静かなチエの印象に好意を持ったと推察される。それは1928年6月に賢治が伊豆大島を訪問したときの作品「三原」や、その後の彼の言動にもはっきりと表われている。特に伊豆大島から帰ってから友人に語った言葉は賢治の思いを表わしている。

「神父セルゲイの思いをした。指は切らなかったがね。おれは結婚するとすれば、あの女性だな」

神父セルゲイとは、トルストイの小説の登場人物である。もともとロシア皇帝に使えていた親衛隊だったが、恋人を皇帝に取られてしまい隠者となった。この隠者をたぶらかそうと、有る女性が道に迷ったふりをしてセルゲイの気を惹いてみた。セルゲイは彼女の部屋に忍び込みたい思いをこらえるため、自らの指を斧で切って、その誘惑に耐えたというのである。このあたりが賢治らしい、実にユーモアあふれた表現なのだが、少なくとも賢治はかなり乗り気になっていたのだろう。

ただ、残念ながら、伊豆大島から帰った賢治を待っていたのは、夏の大干ばつであった。

(6)

伊藤チエに対して、ほのかな好意をもったものの、積極的に踏み込むことなく、船で伊豆大島を後にした賢治。その気持ちは詩作にも表われている。「三原」の第三部には、賢治の気持ちが珍しく直球に近い表現がある。

「なぜわたくしは離れて来るその島を  
じっと見つめて来なかったでせう  
もういま南にあなたの島はすっかり見えず  
わづかに伊豆の山山が  
その方向を指し示すだけです  
たうたうわたくしは  
いそがしくあなた方を離れてしまったのです」

高瀬露に困惑していた賢治は、逆に静かな雰囲気を持っていたチエに惹かれたのかもしれない。当時としては、水沢の伊藤家と花巻の宮澤家では家柄も同格であり、申し分の無い結婚話であった。時間が許せば、本当に結婚し、歴史が変わっていたかも知れない。

しかし、現実は無情であった。花巻に帰って賢治を待っていたのが、夏の干ばつである。おそらく賢治を頼っていた農家からの相談は増えていただろうし、また夏の暑さそのものが病弱な賢治の体を痛めつけたことは確かだろう。こうして、8月の半ばには賢治は病床に伏してしまった。実家でしばらく、養生していたのだが、なにしろ熱が一ヶ月以上下がらなかったという。さらに年末には肺炎を引き起こし、下根子の羅須地人協会は事実上、閉鎖を余儀なくされる。結婚どころでは無くなってしまったのである。

賢治は、妹と同じ結核に冒されていたとされている。通常なら、結核患者との結婚など考えられない時代である。ただ、チエはもともと結核だった兄の七雄の面倒を見ていたくらいだから、実はそれほど障壁とは思わなかったのかもしれない。事実、賢治が病から立ち直った時期、結婚話は再燃したらしい。ただし、それは賢治の方が乗り気では無かった。もはや死を予感していたかのもかもしれない。

一方のチエも、大島農芸学校を立ち上げた数ヶ月後に七雄が亡くなり、東京の保育園に保母として復帰したが、やはり結核を発症して病の床に伏していた。だいぶ困窮していたようで、賢治の作品も買う余裕がなく、立ち読みで済ませていたという。結局、伊豆大島で会ったきり、二度と賢治に会うこともなく、なんとか戦後の昭和を生き抜いて、1989年に亡くなっている。

ところで、この時期になると賢治の新作には、ほとんど星や宇宙は現れない。病床中に作ったとされる詩にも星どころか、月さえもほとんど登場しないのである。おそらく自らの死を予感する中で、それどころではなかったのかも知れない。